

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	佐藤 真人
論文題目	日吉社及び山王神道の研究
審査要旨	
<p>山王神道は、比叡山延暦寺の鎮守社である日吉社をめぐる神道である。言わば、天台宗の神道であり、続天台宗全書や神道大系に関連諸文献を収められたことに伴って書誌的研究が進展して来た。しかし、神仏習合思想としての成立と展開については、伊勢神道や両部神道等といった神道諸流派の研究と比較すると不十分であった。また、日吉社自体の信仰史研究についても多くの課題を残し、伊勢神宮や石清水八幡宮等の研究状況と比べると遅れが目立つ。本研究は、そういった点について、従来の研究における不備を補い、新たな視点を示すことを企図している。全体の構成は、序言・三部十一章・結語であり、先ず目次を示せば次の通りである。</p>	
序言	
第一部 日吉社の歴史的展開と山王神道の形成	
第一章 平安初期天台宗の神仏習合思想 一最澄と円珍を中心に一	
第二章 山王七社の成立 第三章 日吉社大宮縁起の考察	
第四章 山王神道教説の形成 一山王七社・北斗七星同体説の成立をめぐって一	
第二部 山王神道関係文献の研究	
第一章 『日吉社禰宜口伝抄』の成立	
第二章 『山家要略記』所収『日吉山王靈応記』と伊勢神道	
第三章 伝大江匡房撰『扶桑明月集』について	
第四章 『延暦寺護国縁起』の考察 一成立事情および記家との関係を中心に一	
第三部 日吉社の祭祀と巫覡	
第一章 中世における日吉祭の祝詞	
第二章 山王神道と日吉社の祭祀 一神饌の歴史的変遷をめぐって一	
第三章 日吉社の巫女・廊御子・木守	
結語	
<p>第一部は、最澄と円珍の神仏習合思想の形成について論じ、特に山王七社の成立と縁起の考察から山王神道の萌芽を考察する。第一章では最澄・円珍と神祇との関係を検討する。最澄と日吉山王との関係性については推測の域を出ないが、円珍の晩年からは確実に本地垂迹思想の神祇観が形成され、後の平安中期における本迹説流布の素地になったとする。第二章は山王七社の成立である。日吉社の神社組織の基幹とされた七社について、天仁元年（1108）には「五所」とあるのが、保延六年（1140）には「日吉七社」とあることから、平安後期の院政期に形成していったことを詳細に論証した。第三章は中世における大宮縁起の生成について検討を行った。第四章では、山王七社と北斗七星同体説の成立を通して、中世山王神道説へと結実していく過程を明らかにした。本章は、本論文の重要な研究として位置づけられる。康和年間（1099～）に台密修法の加供が見られ、鎌倉時代中期、建長年間（1249～）になると山王七社に北斗同体説が充てられ、山王教学が確立したと説く。中世社会において流布していた北斗信仰と本命思想が山王信仰に組み込まれたとした。これは首肯される見解と言えよう。</p>	
<p>第二部では山王神道典籍の成立とその偽書について考察する。第一章は日吉社祭神論の最古本とされてきた『日吉社禰宜口伝抄』について、諸書の検討から疑問を呈し、その成立は近世末期から明治初頭の頃と証拠づけて、本書の信憑性を否定したことは、大きな成果になっている。第</p>	

二章は山王神道と伊勢神道との関係について考察する。伊勢神道の研究は神道の側からは久保田収氏の研究があり、山王神道との比較も行われた。佐藤氏はこれを更に推し進め、『倭姫命世記』『御鎮座本紀』のほか、行忠撰が確実とされている『御鎮座伝記』などに基づいていることを論証した。それにより、伊勢神道の成立期とされる鎌倉時代中期以後の文永・弘安年間の近い期間に、義源書写、正応二年（1289）の『日吉山王霊応記』に繋がることを明らかにした。なお、できれば、伊勢・日吉同体説や伊勢神道との関係は、中世神道における重要な論点であるので、一層詳細な検討が欲しいところである。第三章では、伝大江匡房撰『扶桑明月集』は、山王神道の成立期に当たる鎌倉時代中期の成立として重要典籍であるとした。第四章では、『延暦寺護国縁起』は鎌倉時代後期の成立であるとし、朝廷に対して天台宗の諸宗に対する優位性と天台宗の守護神である日吉山王の霊威を説き明かすために編纂された書籍であることを明らかにしている。このような諸典籍の成立過程を明らかにしたことは、山王神道成立の背景解明に寄与するであろう。

第三部は、日吉社における神祇と祭祀の内実を明らかにしている。第一章で紹介する中世祝詞は吉田神道の影響を受ける以前のもので、平安時代、公祭とされて以後、改変することなく、毎年祭祀に使われてきたものとする。吉田神道以前は、古代からの祭祀・祭式を受け継いできたことを知ることができる。第二章は黒田俊雄氏の顕密体制論に対する批判が組み込まれていて、興味深い。特に神饌研究を通して、日吉社が精進神ではなく、魚味が供膳されていることは着眼点であり、神饌の中味から神仏隔離が確認できることは重要である。山王神道の教説は延暦寺内部のものであり、日吉社の祭祀と神官には連動せず、独自の儀礼が伝えられ、隔離関係があったことは注目される。第三章は巫覡の活動について論じている。第三部は、神仏習合と隔離論の具体的事例研究として、佐藤氏の研究の独自性を評価できる。

全体として、これまでの研究である久保田収『中世神道の研究』、菅原信海『山王神道の研究』などを一層進めてきた功績は大きい。中でも、日吉社における神祇祭祀の形式を明らかにすることで、山王神道の特質を究明することに成果を挙げている。また、思想史とともに日吉社の儀礼・祭祀研究を組み込むことで、中世神道研究の可能性を高めている。近年、中世日本紀研究が盛んであるが、そのことと、佐藤氏の研究が今後どのように繋がっていくか注目されよう。

今後の課題を言えば、佐藤氏がこれまで論じてきた研究、神仏習合と隔離の中で、日吉社と天台宗とがどのように位置づけられるのか、ある程度、第三部にその成果が見られるが、更なる検証を期待したい。中世神道成立に重要な展開の端緒を示した、伊勢神道や両部神道が山王神道とどのような関係を保っていたのかという点についても、これからの解明が待たれる。

以上のように、本論文は従来の研究を進展させ、加えて、独自の研究領域を開拓しているので、博士(文学)の学位を授与するのにふさわしい論文である。

公開審査会開催日	2020年 3月 30日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保 良峻	仏教学(日本・中国)	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	土田 健次郎	中国近世思想・ 日本近世思想	博士(早稲田大学)
審査委員	國學院大學名誉教授・ 同大学院客員教授	岡田 莊司	古代中世神道史	博士(國學院大學)